

全焼のささげ物の祭壇からの火(レビ記結晶の学び 二)

I. **神は、焼き尽くす火です:ヘブル 12:28** こういうわけで、私たちは揺り動かされない王国を受けているのですから、恵みを持つてではありませんか。この恵みによって、私たちが敬虔と畏れをもって、神に喜ばれる奉仕をするためです。29 なぜなら、私たちの神は、焼き尽くす火でもあるからです。

A) 燃やす方として、神は聖です。聖は、神の性質です。彼の聖なる性質にそぐわないものは何であれ、彼は焼き尽くす火として、焼き尽くします。

B) ダニエル書第7章9節から10節において、神の御座は火の炎であり、その車輪は燃える火であり、一筋の火の流れが彼の御前から現れ、出て来ました。この火は、神が絶対的に義であり、完全に聖であることを示しています。

ダニエル7:9 私が見ていると、御座が設けられ、日の老いた方が座しておられた。…彼の御座は火の炎、その車輪は燃える火であった。10 一筋の火の流れが彼の御前から現れ、出て来た。

C) 主は彼の死を通して、命の火であるご自身を解き放って人の中へとみたらし、地上で燃えています:
① 霊なるキリストは、七倍に強化された命を与える霊として、燃やす火です。

② この火は、霊の命の衝撃力(推進力)、主の解き放った神聖な命から出て来る衝撃力です。

③ 私たちはみなこの火によって燃やされてきました。私たちはこの火によって共にもたらされてきました。今私たちは、この火が他の多くの人を燃やすことに負担があります。キリストの神性の隠された栄光が解き放たれた時、神聖な火が地上に投げられ、全地を燃やしました。この火を燃やし続けましょう! だれもそれを止めることはできません」。

D) 神の七つの霊は、御座の前で燃えている七つの火のともし火です。これらの火のともし火は、神の行政を遂行するためです。』

E) いばらやぶの中で燃えている火は、三一の神、すなわち復活の神でした。

F) 神の言葉は火であって、私たちが燃やし、また私たちが信頼している多くの事物を燃やします。

G) 神に仕える願いを持っている人たちが知らなければならないことは、神が焼き尽くす火であって、燃やし活力を与えるということです。神が地上にやって来るとき、火が地上にやって来ます。神が人の中へと入るとき、火が人の中へと入り、人の中で燃えます。

H) 全焼のささげ物の祭壇の上で燃えていた火は、天から下って来ました:

レビ9:24 その時、火がエホバの御前から出て来て、祭壇の上の全焼のささげ物と脂肪の部分の焼き尽くした。すべての民はそれを見ると、鳴り響く喜びの叫び声を上げ、顔を地に伏せた。

歴代上21:26 ダビデはその所でエホバに祭壇を築き、全焼のささげ物と平安のささげ物をささげた。彼がエホバに呼ばわると、エホバは全焼のささげ物の祭壇の上に天から火を下して、彼に答えられた。

① この火は天から下って来た後、祭壇の上で絶えず燃え続けていました。

② 神聖な火、すなわち、燃やす三一の神は、私たちが仕えることができるようにし、また自分の命を犠牲にすることさえできるようにします。

II. **神に対する祭司のすべての奉仕は、全焼のささげ物の祭壇からの火に基づいていなければなりません。また、私たちの奉仕は、この火が燃えることから出て来るものでなければなりません:**

A) 神は、イスラエルの子たちの奉仕がこの火に基づいていることを願いました。香をたくことは、神に対する彼らの奉仕でしたが、香をたくために用いた火は、祭壇から取らなければなりませんでした。

B) 私たちの奉仕は、神の火が燃えることから出て来なければなりません。』

C) 火は、活力の源です。私たちの奉仕が活力に満ちたものとなるために、私たちの奉仕は祭壇からの火を経過しなければなりません:レビ6:13 火は祭壇の上で絶えず燃え続けさせなければならない。それを消してはならない。歴代下7:1 ソロモンが祈り終わると、火が天から下って来て、全焼のささげ物と犠牲を焼き尽くし、エホバの栄光が家を満ちた。

① この火が、私たちの内側の活力、推進力、衝撃力であるべきです。もし私たちがこの火を持っていれば、私たちの奉仕は神から出て来るものであって、私たち自身から出て来るものではないでしょう。

② 新約の奉仕の活力と原動力は、天からの火をもって始まりました。ガリラヤの漁師たちに下ったこの火が、彼らの内側の活力と原動力になりました。使徒2:3 そして、火のような舌が彼らに現れ、それが分かれて彼らめいめいの上にとどまった。

③ 神を愛し、自分自身を神にささげ、神のために進んですべてのものを放棄し、進んで自分自身を神の御手の中に置いて砕かれる人の上で、この火は燃えます。』

D) 祭壇からの火が、奉仕の真の原動力です:

① 私たちの奉仕に関して神が行なう事は、彼の火を送って私たちの内側で燃えることです。

② もし私たちが自分自身を誠実に神にささげるなら、火は天から下って来て私たちが燃やします。このように燃やすことは、私たちが動かす活力となります。そして、このように燃やすことの結果が、私たちの奉仕となります。

ルカ12:49 私が来たのは、地上に火を投じるためである。それがすでに燃え上がっていたならと、私はどんなに願っていることか!

E) 祭壇からの火が、力強い奉仕を生み出します:

① 全焼のささげ物の祭壇は主イエスの十字架であり、火はその霊です。

② 真の奉仕の根拠は、十字架を知り、自分自身を十字架に置いて、神によって獲得され、神聖な火に私たちの内側で燃えていただくことです。これが奉仕を生み出します。

F) 祭壇からの火を経験する人が、金、銀、宝石をもって建造します:

① そのような働きは、神の要素に満ちており、十

字架の力を持っており、神を表現します。

②燃やすことを通して生み出される働きだけが、金、銀、宝石のものです。燃やすことを通して生み出されていない働きは、木、草、刈り株のものです。

Iコリント3:12 ところが、その土台の上に、人が金、銀、宝石、木、草、刈り株をもって建てるなら、

③それぞれの人の働きが火によってテストされる日が来ます。もし私たちの働きが火から出て来たものであるなら、私たちの働きは火のテストに耐えます。

Iコリント3:13 それぞれの人の働きはあらわになります。なぜなら、かの日がそれを明らかにするからです。すなわち、それは火によって現され、その火自身が、それぞれの人の働きがどんなものであるかを証明するのです。』

III. 私たちは、異火をもってではなく、祭壇からの火をもって神に仕えなければなりません：

レビ10:1 さて、アロンの子たち、ナダブとアビフは、それぞれ自分の香炉を取って、火をそれに入れ、香をその上に盛って、異火をエホバの御前に献げた。それは、エホバが彼らに命じておられなかったことである。2 すると、火がエホバの御前から出て来て、彼らを焼き尽くしたので、彼らはエホバの御前で死んだ。

A) 予表によれば、祭壇で燃えている火以外のものはすべて異火です。

B) ナダブとアビフの失敗は、彼らが祭壇からの火を用いなかったことにあります。彼らが用いたのは、俗な火であって、聖なる火ではありませんでした。

C) 異火が表徴するのは、人が神にささげる天然の熱心、天然の愛情、天然の力、天然の能力です。

D) 異火は、自己の火であって、魂の命と肉の命と天然の命とから出て来る火です：

①異火とは、自己の命が神の働きに干渉することを意味します。

②働きは神のものですが、自己の命は、これらの働きが遂行される方法を指図しようとしています。

③異火をささげることは、神への奉仕において自己の方法や知恵を用いて、自己の提案を主張することです。

E) ナダブとアビフが裁かれたのは、彼らが神のためでない事を行なったからではなく、彼らが天然の命にしたがって行動し、天然の方法で神のために事を行なったからです。

F) 異火をささげることは、僭越の罪でした。ナダブとアビフは、僭越にも神のために事を行なおうとしました。

G) これは強い警告であって、私たちが神聖な事柄に触れるときに、私たちの天然の命に十字架を適用する必要があることを、私たちに見せています。そうでなければ、私たちは霊的死を被ります。

H) 神は、火があるかどうかに注意を払うだけでなく、火の源と性質にも注意を払います。私たちの熱心は、祭壇から来なければなりません。』

I) 神から召されているあらゆる人が認識しなければならないことは、自分がいばらやぶであって、自分の内側で火が燃えており、そしてこの火が神ご自身であるということです：

①私たちは一つの学課を学ぶ必要があります。そ

れは、天然の命をその活力と力と能力と共に燃料として用いることをせずに、神に私たちの内側で燃えていただくことによって、神のために働くということです。

②私たちは霊の中で燃え、霊的死をもたらす異火をもってではなく、主の命の火をもって、主に奴隷として仕える必要があります。ローマ12:11 熱心で怠けることなく、霊の中で燃え、主に仕えなさい。

IV. 全焼のささげ物の祭壇の上の火は、絶えず燃え続けさせるべきです。それを絶対に消してはならず、消すべきではありません：

A) 日ごとに、多くの場面で、私たちは自分自身をキリストにあって神にささげて、常にささげるささげ物となり、神によって燃やされる必要があります。それは私たちが他の人たちを燃やすためです。

B) その霊は、私たちの霊を燃やし、私たちの賜物を再び燃え立たせます。このゆえに、私たちはその霊を消すべきではありません：

Iテサロニケ5:19 その霊を消してはいけません。

①私たちは、神が与えてくださった私たちの霊を再び燃え立たせることによって、主に私たちを燃やしていただき、また絶えず燃やし続けていただかなければなりません。IIテモテ1:6 こういうわけで、私があるに思い起こさせたいのは…神の賜物を、再び燃え立たせることです。7 というのは、神が私たちに賜わったのは、臆する霊ではなく、力と、愛と、冷静な思いとの霊であるからです。

②私たちは、神を愛の火として享受して、彼の愛をもって彼を愛し、また他の人を愛さなければなりません。

③私たちは毎朝、主と共に時間を費やして、新しい開始を持ち、彼によって復興されなければなりません。

④私たちは主を呼び求め、自らを奮い立たせて彼を捕らえなければなりません。

⑤私たちは神の御言を祈り読みし、私たちの霊をもって聖書の霊を擦り、神聖な火をつけなければなりません。

⑥私たちは、保留することなく自分自身を主に開いて、主によって照らされ、燃やされ、注入されることによって、七つの火のともし火としての、またキリストの燃える七つの目としての七倍に強化された霊で満たされなければなりません。

⑦私たちはいつも喜んでおり、絶えず祈り、あらゆることで感謝しなければなりません。

⑧私たちは主のために語って、彼を他の人たちの中へと分け与え、神のエコノミーの行動において、きよめ動機づける、私たちの燃やす力としての彼を享受しなければなりません。

⑨私たちは諸召会の中で、また諸召会の間で、互いに組み合わされて、神の一つの行動のために、私たちを聖別する火としての彼を享受しなければなりません。

⑩七倍に強化された霊が七つの火のともし火として燃えることは、私たちを動機づけて、立ち上がり、行動を取らせて、神のエコノミーを完成します。』

経験①: 主の再来時の最終テストに合格するために、毎日祈って十字架を適用し、神の聖なる火が内側で燃え続ける

ルカによる福音書第12章49節において、主イエスは、「私が来たのは、地上に火を投じるためである」と言いました。主イエスが地上に来たのは、私たちが救うためだけでなく、火を私たちの上で燃やすためでした。もし主がご自身を御父の御手に置かれなかったなら、火が地上に投げられることはできなかつたでしょう。この火はその霊です。主イエスは十字架に行って、死の苦しみを受けたとき、神によって得られ、神はその霊を火として天から注ぎ出しました。この火は百二十人の弟子たちの上に下って来て、彼らの中で燃えました。新約のすべての奉仕は、そのように燃えることから出て来ます。

真の奉仕の根拠は、十字架を知り、自分自身を十字架に置いて、神によって獲得され、神聖な火に私たちの内側で燃えていただくことです。これが奉仕を生み出します。祈って、十字架の死を適用する聖徒たちが神から恵みを受け、神の聖なる火は彼らの内側で燃えます。そのような聖徒たちは、自分を顧みたり、思いを自分に付けたりせずに、ただ神の願いを満たすことだけを顧みます。燃やすことを通して生み出される働きだけが、金、銀、宝石のものです。燃やすことを通して生み出されていない働きは、木、草、刈り株のものです。それぞれの人の働きが火によってテストされる日が来ます。もし私たちの働きが火から出て来たものであるなら、私たちの働きは火のテストに耐えます。…もし私たちの働きが天然の人にしがたっており、肉により、地的なものであるなら、それは木、草、刈り株のものです。それぞれの人の働きが火によってあらわになるとき、そのような働きはテストに耐えないで、焼き尽くされ、私たちは損失を被ります。

中高生編

中高生の皆さんには、様々な種類のテストがあります。大きなテストは高校受験、大学受験ですが、それ以外にも中間テスト、期末テスト、模擬試験等があります。クリスチャンであるあなたは、主が再来される時に最終のテストを受けなければなりません。その最終試験に合格すると、千年王国で主と共に共同の王として支配します。しかし、不合格になると、一千年間暗やみの中で訓練を受けることとなります。このように見ると、高校受験も大学受験も最終の試験のためにあります。それはちょうど中間試験、期末試験、模擬試験が高校受験、大学受験のためであるのと同じです。

あなたはすべての試験において、祈って十字架の死を適用することで、神の聖なる火があなたの内側で燃えるようにすべきです。あなたはこのように祈ってください:

i) ゲーム等で集中できない場合:

「主イエスよ、私の散漫な思いを十字架に付けます。私はすぐにゲームをしなくなったり、漫画を読みなくなったり、テレビを見なくなったりして勉強に集中するのが難しいです。おお主イエスよ、私の落ち着かない不安定な思いを十字架に付けます。十字架を通して、霊的命の火が私の内側で燃えてください。この神聖な火が、内側で主の証しのために、私が勉強する活力、推進力、衝撃力となってください。アーメン!」。
レビ6:13 火は祭壇の上で絶えず燃え続けさせなければならぬ。それを消してはならない。

I テサロニケ5:19 その霊を消してはいけません。

ii) 勉強をする気がない場合:

「おお主イエスよ、私は怠け者で、あまり勉強する気がありません。何のために勉強するのかもよくわかりません。しかし、聖書を読み、勉強するのは主の最終のテストに合格するためであることがわかりました。聖書は私に『熱心で怠けることなく』と言っています。この啓示がリマインドして私を怠けることから救ってください。怠惰な私を十字架に付けます。十字架を通して神聖な火が私の内側で燃え続けてください。この火によって、私が熱心に勉強できますように」。 **I コリント3:12** ところが、その土台の上に、人が金、銀、宝石、木、草、刈り株をもって建てるなら、**13** それぞれの人の働きはあらわになります。なぜなら、かの日がそれを明らかにするからです。すなわち、それは火によって現され、その火自身が、それぞれの人の働きがどんなものであるかを証明するのです。

FT「かの日」: キリストの再来の日です。その日に、彼はすべての信者を裁かれます。 **ローマ12:11** 熱心で怠けることなく、霊の中で燃え、主に仕えなさい。

iii) 「合格できなければどうなるのだろう」と心配して集中できない場合:

「おお主イエスよ、私が勉強している時、受験に合格しないのではないかとこの心配事がいつもやってきます。受験に落ちると格好が悪いか色々複雑に考えてしまいます。しかし、心配事はサタンの火の投げやりです。信仰の盾を取り、心配事の火の投げやりを消します。クリスチャン生活は、『今日』を生きる生活です。一年後、半年後、1ヶ月後のことを忘れ、今日やるべきことを集中して主と共に実行することができますように。試験の結果を主に委ねます。主に感謝します」。 **エペソ6:16** なおその上に、信仰の盾を取りなさい。それによって、あなたがたはあの邪悪な者の燃える火の投げやりを、いっさい消すことができます。

FT1「燃える火の投げやり」: 燃える火の投げやりは、サタンの誘惑、提案、疑い、疑問、虚偽、攻撃です。燃える火の投げやりは、使徒時代に戦士が使ったものです。使徒はこの言葉を用いて、私たちに対するサタンの攻撃を例証しました。

FT2「信仰の盾」: 邪悪な者の燃える火の投げやりには抵抗する盾として、信仰を持つことができます。キリストはそのような信仰の創始者、完成者です。

経験②: 天然の火によってではなく、神聖な火によって、からだの秩序の中で奉仕する

私たちは、すべての者が奉仕し、機能し、私たちの一タラント、賜物を用いる必要があります。しかし、私たちは天然的方法で、天然の情熱から奉仕しないよう、注意しなければなりません。もちろん、主は私たちが冷たいか生ぬるいかでなく、霊の中で熱くなることを願っておられます。しかし、私たちは天然の命において熱くなるのではなく、霊の中で熱くならなければなりません。 **ローマ人への手紙第12章11節**で、パウロは「**霊の中で燃え、主に仕えなさい**」と私たちに告げています。私たちの天然の命のどのような情熱も神にとっては異火であって、死をもたらすものです。

異火をささげることは、ぶどう酒を飲むことと関係があったかもしれません。ナダブとアピフが死んだ後、神は祭司たちにぶどう酒を飲まないように命じました。…

聖書で、ぶどう酒を飲むことは、世的で、天然的で、物理的で、物質的な事柄を過度に享受することを象徴しています。言い換えると、もし私たちがこの世の何かを過度に享受するなら、これは常に私たちを酔わせるでしょう。私たちが酔っ払っている時、私たちは興奮しており、制御がきかなくなり、規制なしに事を行ないます。アロンの二人の息子たちは酔っ払っていたために、興奮し、自分たちの限度を越えて、規制なしに何かを行なったのかもしれませんが。

人々はあるものを過度に享受しているために、僭越な事をします。彼らは酔っ払っています。祭司たちは酔っ払うと、聖に対する識別力を失います。また彼らは神の民を教えることができなくなります。私たちが酔っ払ったことで、識別力を失うと、私たちは規制のない状態になります。そうすると、私たちは確かに他の人たちが規制されるようにと、教えることはできないでしょう。

在職青年編

ビジネス・パーソンであるあなたは、会社組織が平面ではなく立体であることを認識すべきです。平面であるとは、すべてが平等で自由に振る舞って良いということです。立体であるとは、上司の権限の下で自分に分担された権限の範囲内で、正しく働かなければならないということです。キリストのからだは、命のない会社組織とは異なり、命に満ちた有機体です。しかし、キリストのからだも平面ではなく立体であるということについては、会社組織と原則は同じです。

あなたは会社組織の秩序の中で働く必要があります。またキリストのからだの一の中で奉仕する必要があります。会社では、経営者に大きな権限があり、その下で部長や課長等の中間管理職にそれぞれの部署の権限が分担され、一般社員が中間管理職の管理の下で正しく働かなければなりません。あなたは自分の提案を中間管理職に説明することはできません。あなたが決定することは僭越で越権行為です。このようなことは、会社の秩序を破壊します。それは、あなたの提案が課長のものより良いかどうかの問題ではなく、権限を越えて秩序を破壊する事柄です。このような事柄は、大学や大学院にも存在しますが、会社においては、より明確に権限の問題が存在します。

例えば、あなたの所属する部署であなたの提案したビジネス・プランがベストなものでしたが、部長はそれを採用せず、別の劣ったプランを採用しました。このような場合、どのプランにするかを決定する権限は部長にあるので、あなたは部長の決定に甘んじて服する必要があります。あなたは決して、「この部長は愚かなので私のプランを受け入れない。このような人には従えない」と言って、越権行為を犯してはいけません。このようなことは会社の秩序を破壊します。あなたはむしろ主に感謝して上司に服従する必要があります。更に、このようなケースの場合、あなたのプランがベストであると考えるのは、あなたの主観であり、他の人はそのように感じているとは限りません。あなたは、自分の主観を十字架に付ける必要があります。どちらにしても、ここでの重要な論点は、自分が持っていない権限を自分のものとして上司から取り上げ、行使してはいけないということです。

越権行為は、旧約では異火によって示されており、

それは重大な反逆の罪でした。あなたはこの秩序の問題を仕事の中で学び、召会生活の中で学ぶべきです。

異火は、自己の火であって、魂の命と肉の命と天然の命とから出て来る火です。異火をささげることは、僭越の罪でした。ナダブとアピフは、僭越にも神のために事を行なおうとしました。これは強い警告であって、私たちが神聖な事柄に触れるときに、私たちの天然の命に十字架を適用する必要があることを、私たちに見せています。そうでなければ、私たちは霊的死を被ります。神は、火があるかどうかに注意を払うだけでなく、火の源と性質にも注意を払います。私たちの熱心は、祭壇から来なければなりません。

レビ10:1 さて、アロンの子たち、ナダブとアピフは、それぞれ自分の香炉を取って、火をそれに入れ、香をその上に盛って、異火をエホバの御前に献げた。それは、エホバが彼らに命じておられなかったことである。

2 すると、火がエホバの御前から出て来て、彼らを焼き尽くしたので、彼らはエホバの御前で死んだ。

詩19:13 あなたのしもべを傲慢の罪から守ってください。それらに私を支配させないでください。そうすれば、私は傷のない者となり、大きな違反をすべて取り除きましょう。

クリスチャンであるあなたは、神が秩序の神であることを認識する必要があります。召会生活の中の様々な奉仕には、責任者が按配されています。あなたがその奉仕の責任者であれば、全体を見渡し奉仕が前進するために理にかなった決定を下すべきです。決して威張るために決定してはいけません。また、あなたが責任者でなければ、僭越の罪を犯して自分で決定してはいけません。

職場でも、キリストの十字架を経験し自分の血気によって燃えるのではなく、内側で燃える神聖な火によって動機付けられ、主の証しのために、また召会の財政を支えるために、心から上司に仕え勤勉に働くべきです。更に、できる限り、「残業ばかりして一見仕事をしているように見せること」や「飲み会に頻繁に参加して、上辺だけで上司に仕えようとする」を避けなければなりません。そうしないと、あなたはこの世の人と同じになってしまい、証しがないので主の祝福もありません。

コロサイ 3:22 奴隷たちよ、すべての事で、肉によるあなたがたの主人に従いなさい。人にへつらう上辺だけの仕方ではなく、単一な心で主を畏れつつ従いなさい。

23 あなたがたが何をしても、人に対してではなく、主に対してするように、心から行ないなさい。

補充本102(英1122) 霊と命一七つの霊

- 1 時だいは変わり、 ななつのれいは、
諸召かいのため、 つかわされた霊。
(復) ななばいの霊よ、みわざをなせや。
わがうちさぐり、 われを燃やして、
もちいませ、 しょうかい建造に。
- 2 なな倍のれいは、 しょう会を生かす。
せい徒は転機し、 しょう会は燃える。
- 3 しょう会を供給し、 そなえるために、
いまやかみの霊、 なな倍に強化す。
- 4 その霊、 ななつの 燃えるともし火。
おしえではなく、 われ、もやすため。
- 5 そのれい一さぐり、 刺しとおす目は、
しょう会をきよめ、 われらばく露す。
- 6 その霊、 ゆたかな いのちもたらす。
地ほう召かいは、 たのしみ経験す。